あけぼの

第50号　2024. 3. 1
宇和特別支援学校
（知的障がい部門）
図書館発行

「ぼくはこんな本を読んできた」
松岡式読書論、読書術、書斎論

教頭　松岡　徹

私は知の巨人である立花隆を尊敬している。だから彼の著書を模倣する。私は三畳ほどのウォークインクローゼットを書斎にしている。服と本で雑然としているが片付ける気はない。また本棚は大きな辞書が支えているので、地震で倒れる心配はない。ここ二十年は、辞書を中心に本を買うが、読まない。いつか必要に迫られたら読むことにしている。つまり「本を買う」のが趣味である。そしてすでに私の遺産は、なじみの古本屋が買い取ることになっている。「本を読むのが大人。読まないのが子ども」

母親の声ではなく、自力で初めて読んだと記憶しているのは**『ふとんかいすいよく』（山下明生　あかね書房）**である。私は六歳から八歳まで中耳炎で泳げなかった。プールサイドでいつも楽しそうなクラスメイトを眺めていた。だから読んだ。本校の図書室に寄贈している。ぜひ読んでほしい。

これまでの半生で一番、衝撃を受けたのは**『ノルウェイの森』（村上春樹　講談社文庫）**である。私は高校三年生。受験を忘れてむさぼり読んだ。「なんだ、この文体は。」情景描写が繊細で、無生物主語もある。何年かして無理して、英語版を読んでみた。今でいうハルキストの友人が教えてくれた。「彼はもともと翻訳家なんだ。これも英語で書いて日本語にしたみたいだよ」たしかに日本語訳のような文体である。映像にもなった。彼の他の作品も読んだ。でもこの作品が一番だ。

私が住んでいたところはTBS系列が映らなかったので**『青が散る』（宮本輝　文春文庫）**との出会いは遅かった。同じ作家の『優駿』の映画版を見た友人が「原作のほうがもっと面白かった」というのを聞いて、なぜかこの作品を読んだ。高校生だったと思うが、もしかすると浪人時代かもしれない。大学に対する漠然とした憧れはこの作品によって生まれた。私小説かのような文体で「王道のテニス」か「覇道のテニス」かをめぐって語られる。なぜか本棚に二冊あるのは、誰かに貸していたからなのか、はたまた誰かに借りていたからなのか、わからない。ただし、本については、いくら面白くても人に勧めるような恥ずかしいことはしていない。人に勧められて読んで面白かったためしがない。

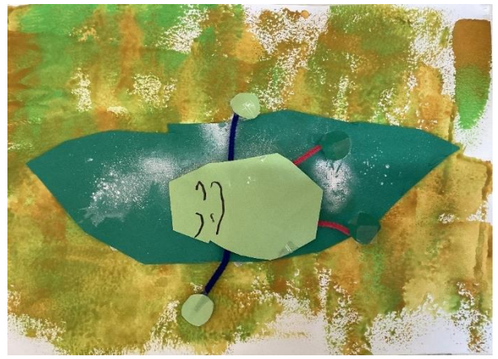
「まっちゃんの母校が小説になってるよ」院生の控室に響く声。第四回坊っちゃん文学賞を受賞した**『がんばっていきまっしょい』（敷村良子　幻冬舎文庫）**である。坊っちゃん文学賞がマガジンハウスによって創設されたが、審査委員長の作家が気に入らなかったので、私は応募しなかった。でもほぼ書き上げた小説のタイトルは「がんばっていきましょい」（母校の掛け声には「っ」はいらない。）中身は違うが、青春小説であることは同じ。ショックだった。ちなみにこのとき勧められて、活字を追ったが、すなわち読んでみたが、内容は全く覚えていない。それ以来、断筆している。

ぼくはこんな本を読んできた。最後に最近読んだ本を紹介しよう。『三角形のなぞ』このつづきは「学校新聞」を読んでいただきたい。

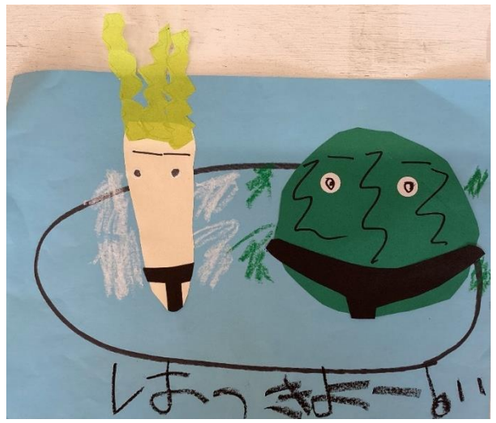
読書感想画

「さつまのおいも」
小学部三年月組
水谷　梨咲

「そらまめくんのベッド」
小学部五年月組
竹内　柊亮



「はっきよい畑場所」
小学部五年月組
西村　琉征



「小さい秋みつけた」
中学部三年
斧　松吾
野川　蒼介
矢野　健太

読書感想文

O型自分の説明書

高等部一年G組　水本　歩乃香

私は読書感想文に「O型自分の説明書」という本を選びました。この本は、O型の人はどのような特性があるのかを知ることができる本です。私がこの本を読んで、自分に当てはまっているなと思うところをいくつか紹介します。

一つ目は、「ないしょの話」をうっかりしゃべってしまうことです。私は、友達にないしょの話をされていたのに、うっかりしゃべってしまい、友達を怒らせてしまったことが何回もありました。だからこれからは、友達と約束したことは守れるようにしていきたいです。

二つ目は、部屋が汚いということです。私は、あせっているときや何かに夢中になっているときに、適当に片づけをしてしまい、部屋が汚くなることが何回もあります。だからこれからは、何かに夢中になっていても、片付けを適当にせず、ゆっくり落ち着いて片づけをしていこうと思います。

このように、O型の私に当てはまっていることがいくつかありました。これらのことを改善していくために、自分自身で目標を立て、その目標に向かって少しずつ努力をしていきたいです。そして、自分に当てはまっている良くないところを減らしていけるように、これからの生活で気を付けていこうと思います。

「おにぎりのひみつ」を読んで

高等部二年F組　佐々木　琉惺

僕は「おにぎりのひみつ」という本を読みました。おにぎりについていろいろ知ることができるかなと思い読み始めましたが、それよりも印象に残る場面がありました。

この本の主人公ノブは、サッカークラブのエースで活躍を期待されていますが、いざというときプレッシャーに弱く、試合でゴールを決めることができず負けてしまい、落ち込んでしまいます。僕も、初めてやることや苦手な授業があると自信がなくなり、とても不安になります。ノブに似ていると感じ、本を読み進めました。

落ち込んでいたノブは、戦国時代にタイムスリップし、殿と出会います。おなかをすかせていた殿にノブは、自分の持っていたおにぎりをあげ、殿はおにぎりのおいしさに感動し、戦のためのにぎり飯六千個を作ることをノブに頼みます。明朝までに六千個やりとげられるか、このときも不安でしたが、殿は戦いに勝ち、友情が生まれます。その時に殿が言った言葉が心に残っています。

「自分を信じ、自分の信念を信じ、自分の未来を信じる」

僕も、前に書いたように、初めてやることや苦手な授業があると、不安になります。しかし、やってみると案外どうってことなかったり、繰り返しやっていくことで、できることが増えたりします。それが、自信へつながるのではないでしょうか。

これからも、不安になることもあるかもしれませんが、やってみればできると自分を信じ、頑張っていこうと思います。

天国の犬ものがたり
～夢のバトン～

高等部三年G組　井上　美沙姫

この本は、トリマーを目指す明日香ちゃんと、愛犬のピノのものがたりです。明日香ちゃんの手はとても温かくて優しくて、頭をなでてくれてとても大好きでした。ピノのカットは、手なれない様子でした。そして明日香ちゃんは、トリマーの専門学校へ通うことになりました。いろいろな犬のフワフワの毛をなでるのが好きでした。毎日カットやブラシをしているうちに心が通じ合っていきました。

オレンジ・緑・青・赤にいろどられた、四つのクローバーの話が出てきました。それぞれの葉の色には、伝えたいことや大切な思いが込められています。オレンジは、愛。大切な人を思う気持ちで、オレンジ色の太陽の日差しのように心を温かくする気持ちです。緑は、優しさ。固まっている人や立場の弱い人や動物に、手を差し伸べるやさしさがあります。青は、想像力。自分と違う人の気持ちを思い協力することが大切です。赤は、勇気。強いものに立ち向かい、間違った気持ちを正すというものです。明日香ちゃんは、突然事故で亡くなってしまいましたが、ピノにとってはとても大切な存在でした。明日香ちゃんの代わりに妹が夢を受け継ぎました。明日香ちゃんのように優しくて暖かいトリマーになってほしいと思いました。

動物や人間は、心が通じ合っていると思います。一日一日幸せなことを少しずつ見つけて、私もたくさんの人を救ってあげたいと思いました。この本に出会って、もっともっと命を大切に生きていこうと思います。

多読賞

本校では、「児童・生徒の読書意欲を高める」ことを目的として、毎年多読賞の表彰を行っています。

一月末までに目標読書冊数に達した十九名が表彰されます。

高等部（五十冊以上）　一名
中学部（三十五冊以上）　四名
小学部（二十冊以上）　十四名

図書室に置いてあるリクエストボックスにたくさんのリクエストが届きます。今年度、リクエストに応えて、深海生物と鳥の図鑑、ジブリアニメのＤＶＤなどをたくさん購入しました。

～図書委員会の活動～

本校の図書委員会は高等部一年生から三年生で活動しています。主な活動は、月に一回の図書委員会とお話会、週に一回の昼休みの貸出当番と図書の整理です。毎月のお話会では図書委員が絵本のページを分担し、読む練習をして本番に臨んでいます。クリスマスお話会には、たくさんの児童・生徒が聞きに来てくれました。

私は、図書委員として昼休みの当番やお話会を行いました。お話会を聞きに来てくれて、うれしかったです。

三年Ｆ組　松原　理恵